

具體的人性の研究 (ホール先生を吊ふ)

野 上 俊 夫

一

一九二四年四月二十四日、世界に於ける兒童研究の泰斗グランヴィル、スタンレー、ホールは、激しい肺炎に續いて起つた腎臓炎の爲めに遂に永眠された。一八四六年二月一日の誕生であるから、滿七十八歳三個月、年齢から云へば可なりの高齡であるけれども、顧みてあらゆる方面に非常な活動をした氏の生涯を思ひ、而かも末年更に一大奮發をして、これからは在來の有らゆる仕事よりも一層よい事に着手する積りだと云つて居た其の希望を果さずに世を終つたことを考へると、何とも遺憾に堪へない。直接に氏に接してその教を受けたのは僅々二三個月の短時日に過ぎないが、其の研究や著書を通じて得た所は言葉に云ひ表はし得ない程多いと信じて居る私は、こゝに少しく氏の研究の學界に於ける地位について述べて追吊の意を表し度いと思ふ。

云ふまでも無く心理學は人間の精神現象の研究を以て其の目的として居る。「精神現象」といふ言葉の意味については昔から随分いろ／＼な議論があり、又心理學がその内の如何なる部分まで研究するかといふことについても、學者の考へは區々であつて、或は單に意識的現象のみを研究するに止めんとし、或は半意識若しくは無意識の現象をも研究するのみならず、寧ろ研究の主眼點を明瞭なる意識よりも不明なる無意識的現象に置かんとするものもあり、更に人間の行動全體を研究するにありと主張するもあり、千差萬別とも云ふべきであるけれども、兎に角今日の心理學は純粹なる科學の立場にあるから、何よりも先きに意識的なり或は行動的なる事實を集むることを第一とし、而して後にその集つた事實を研究して、之れを説明し更にその原理原則を發見するといふ風に向ふべきこと、爾他の諸科學に於けると同様にすべきである。約言すれば心理學は純粹に經驗的なる立場に立つて進むべきである。

然るに心理學は、諸他の科學中最も後れて哲學から獨立したが爲めに、今日に於いても尙ほ哲學の影響を脱する能はざる所が甚多く、心理學の研究は哲學者が其の片

手間にやつて居るといふことが多いために、他の物的諸科學のやうに純粹なる科學的態度をとり得ずして、半形而上學的な奇妙な有様を脱し得ないやうな點が少くない。ヅントが近世心理學の樹立者の中の第一人者であり、又或る程度まではその完成者であることは何人も異論なき所であるが、彼れの個人心理學即ち生理的心理學なるものは、一面に於いて極めて經驗的であり科學的であるやうに見えるけれども、大體に於いて著しく哲學的であり、若しくは哲學者の心理學であることを免れない。先づ第一に、彼れの心理學は著しく知的である。これは哲學者の心理學に共通なる一つの特色であつて、一體に學者特に哲學者は、其の専門的の思索をする時には主として知的活動によるので、彼等によつて研究さるゝ心理學が著しく知的の特質を帯びるのが常である。ヅントの心理學も亦此の例にもれない。彼れは自分の立場を意志的 (Voluntarismus) なりと云つて居るに係らず、實際のやり方は全然知的であり、或は感覺的ともいふべく、先づ心的要素を立し、之を感覺と簡單感情との二となし、一切の精神活動は此等のものゝ結合より成るといふ風に説いて居る。而かも此の兩方面の内、彼れの主として居る所は感覺及びその結合たる觀念的方面であつて、種々なる感覺の記述や、空間時間の知覺などについては非常に多くの紙數を

費して居るに係らず、感情や意志の方面については實に僅かしか述べて居らざるのみならず、其の説く所が頗る抽象的であり、形式的であり、典型的であつて、實際に於いて愛し、憎み、怨み、怒り、悲み、喜んで居る人生の活きたる事實とは極めて縁の遠いものとなつて居る。

第二にヴントの心理學は、實際の事實を記載し説明することよりも、寧ろ心理學といふ一つの組織體系を作ることにより力を過ぎたかの觀がある。心理學の事實は動搖不定にして最も觀察し難く、記憶の誤りが混入して、其の真相を捕捉することが困難であるから、今までの心理學者の得た知識は、未だ頗る斷片的で不確なる所頗る多いのであるが、ヴントの心理學は恰かも哲學の體系の如く秩序整然として居り、而かもこの秩序や系統を作るが爲めに不確なる事をも確かなるが如き獨斷論をなした點が少くない。ヴントの正統を嗣いだと見るべきティツチナーすらも不確なる事實を公式化^{する}ことがヴントの特有の缺點なりと云つて居る。彼れの有名なる感情の三方向説の如き、殊に之れを可なり不確なる呼吸脈搏の變化に關聯せしめて作つた圖式の如き、其の最も著しい例である。

此等の點に於いてヴントの心理學は、彼れが極力攻撃して居るヘルバルトの心理

學に類似して居るといへる。ヘルバルトが所謂『表象』なるものを一切の精神活動の根柢として數學的心理學を組立てたことは今日から見るとたゞ學者の遊戲に過ぎないが、ゾントの感覺と簡單感情といふものも亦其の本質に於いて頗るヘルバルトの表象に似て居る。ヘルバルトが二つの表象の禁止關係を $a+b : a : b : \frac{a}{b}$ の式にてあらはし、或はその禁止されたる部分の沈み行く割合は時間と一定の關係ありとして、之れを $a \parallel b$ (Hering) なる式であらはさうとした事と、ゾントの感情の圖式や意志の分類の圖式などは、本質に於いて頗る類似して居るといひ得る。

三

スタンレー、ホルの研究は、此くの如き在來の哲學的心理學に對して正反對の立場を取つて居る。即ち心理學を一切の哲學的係累から切り放つて、純粹なる科學的の立場を取らしめやうとし、人間の心身の活動をそのありのまゝに研究することに主力をそゝいだ。而して人間を其の有りのまゝに見る時には、何人にも先づ氣のつくことは、意識的殊に知的の活動に比して感情的若しくは無意識的活動の極めて多く且有力なることである。普通の人々の平生の活動の大部分は感情欲望、若しくは

在來の偏見因襲等によりてなされて居るのであつて、明瞭なる意識を以て知的の活動を營むことは甚だ少い。最も多く知的活動をなすことを特色として居る學者、特に哲學者の如きものですら、自己の専門たる學問研究以外の事柄については感情とか欲望とかいふものによつて支配さるゝことが極めて多く、時とすると冷靜にして純知的なるべき學問上の議論に於いてすら、宗教的若しくは實際的なる種々の偏見にわづらはされ、或は論敵に對する愛憎の念に支配されて公平なる判斷を妨げらるゝことさへも少からずある。世間の大多數の人々の日常の活動は、殆んど悉く自己及び自己の家族に食物を供給せんが爲めになされ、人間社會の道徳、宗教、文學、藝術等が殆どすべて性的要求と密接なる關係を有することは、今日人間研究者の間に疑ふべからざる事實として認められて居る。然るに在來の心理學には、此くの如き重要有力なる食欲若しくは性慾の如きものに關して居る所は殆ど皆無といつてよい。ヴントの生理的心理学二千餘頁の中に、此兩者について述べた所は一二個所に過ぎず、而かもそれが他の事に關する序に極めて簡単に觸れられて居るに過ぎない。感覺の性質のことだけに二百七十餘頁、時間空間などの知覺について四百五十頁を費し居るのと比べて見ると、如何にヴントが此等の本能とか欲望とかいふ方面

を輕視して居るか分る。

ホーレルは在來の心理學の此くの如き知力過重の弊に反對して起つた。彼れは人間の活動の大部分が本能、感情、欲望等によりて支配されることを極言し、これ等の作用を研究する事が心理學研究の最も重要な部分なりとした。彼れが心理學研究に於いて主力を注いだのは殆んどすべて此の方面に關係するものであつた。今其の最も重要なものを舉げて見るならば、一八九四年に出でたる『憤怒の研究』と『泣きと笑ひとの研究』を其の初めとし、それに次いで『少年期及青年期に於ける恐怖』(一八九五年)、『癡り、洒落、機智、滑稽、笑ひの研究』(一八九六)等の大なる研究が出で、其の他『兒童の食慾と食物』(一八九五)、『移住、外出、彷徨と家庭を懐しがること』(一八九六)、『熱及び寒に對する兒童の反應』(一八九七)、『青年期の感情』(一九〇一)、『動物に對する兒童の考へ、反應及び感情』(一九〇二)、『明暗に對する反應』(一九〇二)、『花に對する兒童の興味』(一九〇二)、『兒童の迷信』(一九〇二)、『食物と食慾』(一九〇三)、『執拗と從順』(一九〇四)、『嫉妬及び羨望』(一九〇五)、『兒童の遊戲本能』(一九〇六)、『舞踊』(一九〇八)、『自殺の心理』(一九〇八)、『憤怒及恐怖』(一九一三)等の研究が相次いで出でた。此等は多くの中から選擇した少數に過ぎないが、如何にホーレルが本能や感情の

方面に重きをおいたかを知るには充分であらう。

四

ホルルの一生涯を通じて其の研究の中心思想たりしものは「進化」の一語である。彼れは新英蘭の片田舎の農家に生れ、其の幼時をこゝに過し、自然の中に住み、動物植物を友として生活して居たが爲めに、生物の進化といふことに不知不識の間に思ひを潜めるやうになつたらしい。彼れが其の自傳に於いて語る所によれば、彼れは少年時代には母に向つて子どもが如何にして生るゝかを執拗に問うた。又神が老人だとすると、その神の幼児の時もあつたであらうかと考へ、悪魔についても同様に考へた。學校時代に人は猿から生じたものだと論じて大に論難せられ、又星雲説について幼稚な論文を書いたこともあつた。其後哲學を學ぶに及んで、トレンデレンブルグが變化 (werden) は第一の範疇なりと云つたのにいたく共鳴し、シェリングが總ての有機及び無機の自然が或有力なる過程の諸段階なりと説いたのに感動し、後にダーウイン、ハックスレー、スペンサー、ヘッケル等の説に心酔し、之は單に人間の身體的方面に於いて眞なるのみに非ずして、其の精神的方面に於いても同様に眞ならざ

るべからずと考へ、『個體發生は種族發生を繰返す』といふことを、其のまゝ精神的面にも應用して有名なる『反復説』(Recapitulation Theory)を立てた。即ち人間が胎兒から乳兒、幼兒、少年、青年等の諸時期を経て大人になるに随つて、その身體のみならず、精神作用も、亦恰かも單細胞生物から種々なる下等動物の段階を通つて脊椎動物の状態に達し、魚、鳥、哺乳類の諸動物の時期を経て遂に下等なる野蠻人の時代に至り、次第に開けたる人の状態に達すると説く。例へば吾人が實際受くる害以上に爬虫類を恐れるのは、嘗て吾人の祖先が洞窟生活をして居た時代に此等の動物に大に苦められた時代の遺物であるとし、兒童が樹木に對して特殊の興味を有し、又樹に上ることを好むのは、祖先が樹上に猿の如き生活をした時代の作用の繰返さるゝものなりと考へる類である。

結局吾人々類は、現在の状態に於いて完成したもので無く、過去の幼稚下等なる状態から進化して漸く現在の状態まで進化し、更に今後一層完全なる状態に近かんとする過渡の状態にある。随つて吾人の背後には悠久なる年月の遺傳を負うて居るが、又その前方には悠久なる將來に於ける無限の完成に向つて進みつゝあるのである。随つて現在の人間の精神には下等なる單細胞生物たりし時代よりの遺傳が重

きをなして居り、精神作用に於いても亦下等なる動物時代からあつて、他の動物と共通なる本能や感情の如きものが重きをなし、哺乳動物時代から人間時代に於いて特に發達した知的作用の如きは、其の發生の年月から云つて極めて新しく、随つてそれが人間の行動を支配する力も頗る弱い。ホールは或る時はこれを氷山にたとへて居り、氷山の海面に現はれて居る部分は可なり大きくても、その海水中に没して居る所は之に比して何十倍の大きさを有するが故に、氷の流るゝは海面を吹く風の方向によらずして海の深みを流るゝ潮流によつて支配さるゝが如く、人間の知的活動は外部から見易いけれども、實際に人を動かすものは人の心の底深く潜める本能的無意識的なる作用であると云つて居る。又或る時は心の作用は一本の樹木に譬ふべしとし、意識的若しくは知的作用は高く空中に聳ゆる枝葉の如く、本能的無意識的なる作用こそは樹木の根幹に比すべき重要な作用なりと述べ、随つて心を研究するには、たゞ現在の意識的作用を研究するのでは不十分で、その過去に溯つて『心の古生物學』(archeology of mind)を研究せねばならぬと云つて居る。

五

心理學の對象とすべき最も主たる問題は本能的若しくは無意識的なる方面なりとして、偕てこれ等の方面を研究するに如何なる方法によるべきか。十九世紀の終の頃に實驗的方法が心理學に應用せらるゝ事が始まり、物理學的又は生理學的なる装置を用ひて研究することが盛んになつて、可なり重要な成績を擧げ得たことは著しい事實であるが、併しこの實驗的研究法は、その性質上意識的知的若しくは感覺的の方面に限られ、本能的感情的の方面に此の方法を用ふる事は至難である。レーマンを始めとしてツォネフ、モイマン等の研究した身體的伴隨現象の研究も、頗る興味ある成績を得た事は事實であり、前述のゾントの感情の三方向説の一つの有力なる根據となつて居るけれども、極めて種々雜多なる感情の微細なるニュアンスに應ずるやうな細かい變化の差は認め難く、又同一現象の研究に於いて學者の得た成績は往々にして頗る矛盾して居るものもあり、殊に最大の難點は、外面にあらはれた呼吸なり脈搏なりの變化が、内省によつて知らるゝ精神活動の如何なる方面に相應するか、の知り難いことであつて、結局これのみで此の方面の研究が大に進むものは考へられない。

ホールは此の缺點を補はんが爲めに、頗る簡單にして奇抜なる研究法を案出した、

それは有名なる『質問法』(questionnaire method)であつて、或る事實について一定數の質問を作り、之れに對して相當の素養ある人々の答へを求め、集つた答へを處理して何等かの結果を得んとする方法である。例へば今恐怖の研究をするに當つて、(一)君は如何なるものを最多く恐るゝか。(二)君の最も恐ろしかつた経験を記述せよ。(三)恐れた時には如何なる反應をなすのが常であるか。逃げ出すか。縮み上るか。顔を隠すか。叫ぶか。……等の如き數多の問題を成るべく秩序的に出して、之れに對する答へを處理せんとするのである。前に述べた『憤怒の研究』(二八九四年)と同年に出でたる『人形の研究』が此の方法を用ひた最初のものであつて、當時に於いては可なり物議を惹起した。元來當時は、心理學に精密なる實驗的方法を用ひるとが漸く始まりかけた頃で、學者はその目新しさに非常な興味を惹かれ、これによつて在來の單なる内觀法による不確なる心理學と全く異つた精確なる心理學を樹立せんと望める人々の多かつた際であつたから、質問法の如き一見たよりないやうに見えるやり方が果して何の效果を得るかといふやうな考へが、多くの學者の心の中に生じたのも無理も無い。又これによつて得られた結果といふものも、最初の中は随分不確らしいものや極めて平凡なものやが多く、例へば『人形の研究』に於いて、兒童は如何な

る材料で作れる人形を好むかといふ問ひに對する考への統計の結果、八百四十五人の兒童の内、百九十一人は臘製の人形を好み、百六十三人は紙製のを好み、百五十三人は陶製のを好む。下層といふやうなことが知られたので、此くの如き事は學問上何の役に立つのかといふやうな批難が續々起り、ジュームスやミュンスターベルヒは、學校の教師が此くの如き統計的研究の爲めに兒童を調査することは全くよくないことだと論じたこともある。併しながらそれは質問の出し方や答への整理の仕方に未だ十分ならざる點のあつたからで、必しも質問法そのものゝ缺點といふことは出來ない。質問法が次第に進むにつれて、その方法も次第に進歩し、質問も亦精細になり、答への取扱ひ方も亦進歩して來た。「樸り、洒落、機智、滑稽、笑ひの研究」(二八九六)の爲めに發せられた問ひの如きは、實に左の如く秩序的であり、且精密を極めたものであつた。

一、君が若しも物理的方法によつて兒童を笑はせんとするならば如何にするか。例へば嬰兒には其の頬に觸れ又は顫を櫟るか。三歳乃至六歳の兒童には動物の鳴き聲の眞似又は動作によるか。青年に對しては如何。觸接若しくは動作、及び言語ならざる音聲によりて人を笑はしむべき有らゆる方法を擧げよ。孰れ

の方法が最も確かに笑ひを生せしむべきか。君は或る時に限り特に笑ひ易き事ありや。兒童等も亦此くの如き事ありや。君の身體の中最もこそばゆきは何れの部分なりや。又如何なる運動によりて最もこそばゆく感ずるか。

二、種々の個人の偷笑、作り笑、微笑、忍び笑、嘲笑、痙攣的及ヒステリーの笑ひ等の多くの場合を擧げよ。笑ひに關する各個人の特徴例へば微笑する時に片頬にてするか、作り笑ひをするか、齒を著しくあらはすか、口を開きて笑ふか閉ぢて笑ふか、頭及び眼の位置如何、笑ふ時の態度及び音聲如何、種々の人が笑ふ時に發する音聲に如何なる種類ありや。笑ひが顔面上に次第に擴がる時、最初に如何なる所に始まり如何にして終るか。身體に於いては如何。痙攣的の笑によつて倒るゝに至るまでの身體の變化如何。自己及び他人に對する感じ、徵候及び後の結果如何。笑ひによりて死せる人の例をきけることありや、又文學と笑ひと形容記述せるものを擧げよ。笑ふ時に美しき顔附をなし又美しき音聲を發するやうに兒童を教へ得べきか。又君は此くの如く教へんと欲するか、或は自然に放任せんとするか。兒童は喜びて手を打ち又は飛び上ることありや。兒童が香ひ又は味ひによりて笑ふことありや。

三、兒童が大笑ひしたるを見たることあらば、其の二三の例を記せ。而してその原因、物語、戯言、奇妙なる偶然の人真似などを記載せよ。兒童は他人の如何なる性質及び動作を見て笑ふか。教室に於いて最も滑稽なりと思はるゝ事柄を舉げよ。石盤及び黑板に畫ける滑稽畫、衣服に附屬せしめたる物品、動作、習慣、衣服等にして實に可笑しいと感ぜられたるものを述べよ。幻燈の映畫中最も兒童を笑はしむるものは如何なるものか。讀物に於いては如何。(下半省略)

四、動物が笑ひたるやうに見えることありや。(中略)。犬が尾を以て笑ふことは真か。牝雞、鵝、鳥、馬、猿、犢などが笑ひと思はるべき音聲を發することありや。(下略)。

五、君が最も強く笑ひたる場合を思出し、其の原因を記せ。他人に於いて、又劇場又は音楽師の演奏などの觀客聽衆に於いて大に笑へる場合を記せ。過去の出來事中、思ひ出す度に必ず笑ひを催さしむるものありや。君の聞きたる中の最も滑稽なる事は如何なる事か。

六、次ぎの各項に就いて君の知れる最上のものを記せ。(イ)地口。(ロ)即答。(ハ)實際上の戯言。(ニ)最も可笑しき逸話。(ホ)最可笑しき奇妙なる物語。(ヘ)君が見又

は讀みたる最も滑稽なる人物。

七、 次ぎのものゝ内、君の最も好むもの及び最も嫌ふものは何か。(イ)狂詩狂歌等。(ロ)ボンチ繪。(ハ)諷刺。(ニ)馬鹿々々しく飛び騒ぐこと。(ホ)滑稽なるウブなる變人的なる性質。(但し人間、文學及び演劇に於いて)。以上の内容は何を最も好み最も嫌ふか。その理由如何。故意に滑稽の感を起さんとし、又は君を笑はしめんとして失敗せるものある時の君の感じ如何。(下略)

八、 自己及び他人に於いて純粹に自發的なる笑を生せしことありや。即ち單に自己満足愉快なる氣持、生の喜びの爲めに笑へることありや。(下略)

九、 老人の機智、滑稽物語若しくは笑ひ等に特別の性質ありや。機智及び滑稽に關して、青年及び老年の間に類似の點を認めたることありや。

十、 他人の困苦を笑ひ又は喜びたる場合ありや。又は兒童が醜き人、不具なる人を笑へる場合を記載せよ。

十一、 雜、此の問題に役立つべき事項又は書物あらば之を述べよ。精神病者の笑ふは何故なりや。異なる民族に於いて機智及び滑稽の差ありや。痛みを生すべき動作例へば痛き所をつまむ等の事を喜ぶことありや。その理由如何。

此くの如き質問に對する多くの答への中には、簡單なるものあり、詳密なるものあり、其の價值はいろ／＼差があつたが、一方に於いて種々の批難あるに係らず、一方には熱心なる協同者もあつて、中には其の材料を集める方法を研究して發表したもののさへもある。材料の集まつた範圍も單に合衆國內のみならず、英國、カナダ、南アフリカ等から時としては獨逸、印度、濠洲、支那、日本などからも來た。

或は此くの如き問ひに答へるものは、多くは同じやうな種類の人々のみに限られ、特に問ひに出されるやうな經驗を多く有つて居る所の、謂はゞ少しく異常性を帶びた人々の方から答へが多く來るであらうから、それから得られた結果は決して一般の人々の場合に推しひろめることは出來ないといふ批難もあつたが、一方から云へば此くの如き缺點は何によらず多くの材料を集める事の必要な研究に共通したものであつて、云はゞ已むを得ないものであり、かゝる缺點を恐れて此の方法を中止するとすれば、他に之れにまさる方法の發見せらるゝまでは結局何等の知識も得られないことになる。結局此の研究法を注意して行ふより外に仕方は無いのである。ホールの云つたやうに、人類學は専門家ならざる觀察者でも、學問上必要な事實に直接に接觸して居る人々の集めた事實のお蔭を蒙つて居ること多く、又常にひろく

質問法を用ひて居る。ダーウインですら其の材料の甚だ大なる部分を一種の質問法によつて得た。即ち彼れの取り扱へる種々雑多なる題目に關して、世界のあらゆる方面に居る専門家及び非専門家の觀察者と廣く交通をして其の材料を得たのである。ヴントが兒童の言語や身振りなどを取扱ふ時にもやはりさうしたのであつて、別に特にホールのみを批難すべきことはない。

元來、實驗法の心理學に應用されて以來、研究者は動もすると其の機械の精巧にして方法の嚴密ならざる可からざること非常に非常なる興味をもち、更にその結果を統計的にあらはすやうな場合には、數學が一見如何にも精密なる結果をあらはすが如く見ゆることに眩惑されて、其の取扱ふ事實の性質以上に方法過重的 (hyper methodic) なる遣り方に走り、ホールの云ふやうに『其の對象の要求する以上に精密なる方法を用ひて研究することは單に誇耀に過ぎない』といふアリストテレスの言に背くものが少からずある。實驗心理學研究の初期に多くあらはれたる反應時間の研究や、刺戟闘辯別闘の研究などには隨分此の類のものが多かつた。然るに其後に至つて次第に心理學の對象は大體に於いて此くの如き精密な數量的取扱ひに適せざるものゝ多いことが次第に知らるゝやうになり、反應實驗の意義などは既にヴントによ

つて餘程當初の考へとは異つたものであることが明かにせらるゝに至り、一般に心理實驗に對する學者の心構へが餘程異つて來た。此くの如くにして心理學の研究方法は、決して單に機械や數量を用ふる精密なる方法のみに限らるべきでなく、又況んや肘掛椅子に坐して冥想にふける舊心理學者の方法のみにたよるべきでなく、リポールの云ふやうに、ひろく歴史又は傳記よりも材料を蒐集し來るべく、或はヘルバルトの云へる如く、『内省により、種々の發達の程度にある人々との交際により、教育者や政治家によつてなされたる觀察より、旅行家、歴史家、詩人、道德家の書き物により、最後に亦狂者、病者及び下等動物に關する觀察によりて其の材料を得べきである。』此の見地から見る時は、ホルルの質問法の如きは心理學上の事實、殊に他の方法によつては研究することの殆ど不可能なる本能や感情などの方面の事柄を蒐集するが爲めには、極めて有效なる方法といふべきであらう。尤も之れに伴ふ缺點も有るであらうが、それは注意によつて避けることの必ずしも不可能なものでなく、又純粹内觀法や、實驗法などに附帶する缺點に比して特に大なるものとも云へないのである。

六

進化論的に人の心を見る時は、現在の人の心を研究するに當つて、それよりも初等なる諸動物若しくは子ども心の心を研究することの必要なるべきは當然である。動物心理學についてはホール自身が研究したものは少かつたけれども、其の弟子たちを奨励して可なり盛に研究をなさしめ、ホール主宰の雜誌上に發表せしめたものが可なり多い。就中ポーターの研究はその白眉とすべきものである。ホールは更に此等特殊の研究を集めて『新しい大膽なる大綜合』をなすことが必要であるとし、之れによりて自然に於ける人類の地位について新しい健全なる見地が樹立せらるべしと考へ、昆虫を始めとして、えび、かに、蝸牛、龜、鳩、ペリカン、鳥、鷹等から馬、エミュ、海豹、熊、麝香獸、食肉獸、猿、などに至る諸動物の生活を研究した材料を集めて、此の方面の知識を纏めんと試みたこともあつた。

然れどもホールが眞に其の努力の大なる部分を傾けて研究したのは、云ふ迄もなく兒童の研究であつて、今日の盛なる科學的兒童研究は全くホールを以て其の開祖として居るのである。勿論彼れ以前にもダーウィンやブライヤーやその他種々の人によつてなされた立派な研究はあつたけれども、いづれも他の仕事の餘暇になされた程度のもので、ホールの如く非常に廣い方面から材料を集めて之れを一つの大

なる系統に作り上げんとしたものはそれまで決して無かつたのであり、今日世界に於ける兒童研究の勃興と之に關する實際上の施設の非常に盛になつて來たのは、主としてホールの模範と刺戟とによるものであると云つても決して過言では無い。ホールは、今日世の中に於いて、二十世紀は兒童の世界であるとか、兒童研究の元祖がホール自身であるとかいふことをいふが、兩者とも誤つて居ると述べて居るけれども、之れは單に氏に特有なる謙遜の美德から出た言に外ならぬ。

兒童を研究すると其の發達の間に種々な特色を發見し、之れによつて兒童期を數個の段階に分つことが出来るが、特に著しき段階は春機發動期即ち青年期である。青年期以前の諸期は全然自己中心的若しくは利己的なる時代であつて、大分自己の生長および發育に向つて全力を注ぐのみであるが、青年期に於いて生殖の機能が成熟し來り、自己の後繼者を殘すだけの餘裕が生じたる時には、心身ともに一大變化を生じ、在來の心身の發達に一大革命を生じ、在來少數なりし人格の要素が豊富になり、簡單なりし人格が複雑になり、食を求め危險を避くるだけの動物的生活に過ぎなかつたものか、性慾に伴ふ愛他の本能を生じ、宗教、文學、哲學、藝術等眞に人間的なる要素が人格内に混入し來つて、こゝに漸く人間の生活に入らんとするのである。此くの

如き青年期の革新及び動搖は人間の發達の上に重大なる意義を有し、隨て此の時期の取扱ひ教育の方法は其の一生に重大なる結果を生ずるのであるが、此の點に第一に注意したのは即ちホールであつて、一九〇五年に出した大著『青年期』は此の方面に於いて一新時期を劃したものである。在來はたゞ青年期とは小兒から大人までの過渡期であるといふ位に考へるに過ぎなかつたものが、此の時代に特有なる一大變化をなすことが注意せられ、個人一生涯に於いて重大なる意義あることが一般に認められるやうになり、『青年期』といふ言葉が普通に用ひられるに至つたのは全くホールのお蔭である。

ホールは青年期の研究から進んで成年期、壯年期を研究し、晩年には更に老年期の研究を始め、一九二二年には『老年期』を公にした。例によつて老年に關する醫學者、生物學者、文學者等のあらゆる研究を集めた上に、ホール自ら選擇せる老人たちに十箇條の質問を送つて其の結果を纏めたものであるが、大體に於いて老年期は在來考へられて居たやうな活動の終つたものゝ送る『餘生』といふやうなつまらぬものでなく、人生には老人でなければなし得ない必要なる事柄が多くあり、殊に今後世の中の事が次第に複雑になり行くにつれて、世の中の一通りの事を知るにも可なりの

年月を要するから、實際に世間に出で、活動するのには可なりな老年になることを免れぬ。随つて今後は従前に比して老人の任務は頗る重い。老人自らも此の點を自覺して、世間から除外されたものゝやうにひがむことなく、前途に希望を有つて自己の職分を盡すべきであると説き、最後に「死」に對する、研究といふよりはむしろ信仰の告白ともいふべき美しい文章を以て結んでゐる。

七

此くの如くにして世界の偉大なる發生學的、心理學者スタンレー、ホルルの研究は、兒童に始まり、青年に半ばし、老年の研究に終つて、こゝで人間一生の研究がホルルの一生の中に仕遂げられた譯である。勿論その研究は決して完成したものといふことは出來ず、幾多の缺點、幾多の未熟の點もあるが、これは勿論いつの世いかなる人の研究に於いても當然なことであつて、殊に研究の對象が人間の心身といふ最も複雑なるものである時には尙更然りである。我々が此に於いて殊に尊敬の念に堪へざる點は、氏がどこまでも科學者の立場を失はず、實際の人間心身の活動をその有りのまゝに (at first hand) 取つて研究せんとする態度をあくまで固執された點にある。

在來の哲學者的心理學者が、自己の成熟した心のみを材料として抽象的な思索のみによつて心理研究をなし得ると考へ、此くして得た幾多の知識を直ちに體系化して「心理學原理」や「心理學概論」を作らんとしたやうな態度は、ホールの最も好まなかつた處で、ホールは随分多くの著述をして居るに係らず、心理學全體を纏めたものは遂に書かなかつた。一九〇五年に出た『青年期』の序文の劈頭に「此書は、今用意されて居り、論理的には最初に出版さるべき、著者の心理學を基礎として居る」と書かれたに係らず、爾後二十年遂にその約を果されなかつた事もむしろ面白い事である。大體に於いてホール氏の著書全體を通じて陥つて居る缺點は、其の記述の動もすれば斷片的になつて前後の聯絡を缺くことさへあり、隨つて往々意味の不明瞭なることも少からぬ點である。併しながら過ちを見てこゝに仁を知る。ホールの此の缺點は、やがて在來の心理學者の『系統』や『體系』を作ることにはいそぎ過ぎたのに對して、あくまで經驗的立場を守つて、學說や系統よりも事實を重んずる科學の立場を示すものといふことが出來やう。種々な點に於いて盛にホールを攻撃したソルンダイクが氏を評して、『具體的人性の熱烈なる狂信者』(that intrepid devotee of concrete human nature)によび、『その學說を我れは屢攻撃すれども、その天才をば我は常に讚美する』といへるは、實にスタンレー、ホールに對する好箇の批評であると思ふ。(二三、七、一四)